永遠少女ＯＮＥなのは～輝く季節なの～

ハピ粉200%

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
永遠少女ＯＮＥなのは～輝く季節なの～

【Ｎコード】
Ｎ０１１６Ｗ

【作者名】
ハピ粉２００％

【あらすじ】
初めましての方は始めまして、細々と活動させて頂いているハピ粉２００％と申します。
ちょっと某ゲームの主人公張りに意地悪するなのはが見たくなって書いてみた実験作です。
以外にユーノの違和感がなくて驚いたけど、まだ要検討ですね。
しかし以前は氾濫していたＯＮＥＳＳも今は寂しい……。

反響があれば続きも考えます。
宜しければご意見、ご感想または誤字報告などお待ちしております。

でわでわ～。
※Ａｒｃａｄｉａ様にも投降させて頂いております。
＊＊＊＊＊

ONEなの　01

とても幸せだった。
それが日常であることをわたしは、ときどき忘れてしまうほどだった。
そして、ふと感謝する。

ありがとう、と。
こんな幸せな日常に。

水たまりを駆けぬけ、その跳ねた泥がスカートのすそに付くことだって、その幸せの小さなかけらだった。
永遠に続くと思っていた。
ずっとわたしは水たまりで跳ね回っていられると思っていた。
幸せのかけらを集めていられるのだと思ってた。

でも、壊れるのは一瞬だった。
永遠なんて、なかったんだ。

知らなかった。
そんな、悲しいことをわたしは知らなかった。

知らなかったんだ…。

「えいえいんはあるよ」

彼は言った。

「ここにあるよ」

確かに、彼はそう言った。
永遠のある場所。
…そこにいま、わたしは立っていた。

永遠少女ＯＮＥなのは～輝く季節なの～

―――１９９８／１１／３０（月）

カシャアッ！

耳障りな音とともに、視界が白くなる。
白い、というか、痛い…。
というか…まぶしい…。

「ほら、起きなよーっ」

うーん…そっか、朝か…。
だからまぶしかったんだね…。

しかし起きろと言われて、簡単に起きるわけにはいかない。
なんていうか、本来なら眠っていてはいけない、そのぎりぎりのと

ころでうつらうつらと浅い眠りに身を置くのが、最も意識できる気持ちいい眠りというものでないのだろうか、なんてことを思う。

ぐー…。

ガバァッ！

今度は、吸い込まれるような風圧とともに、体が軽くなる。
軽い、というか、寒い…。

というか…布団がない…。

「ほらぁーっ！」

くそぅ……負けないよ。
私は体を丸くして、逃げゆく体温を必死で繋ぎ止める。
まだ眠気はある。よし。

ぐー…。

バフッッ！

今度は、頭の支えが急になくなったかと思うと、視界が暗転した。
暗転した、というか、息苦しい…。
というか…し、死ぬ…

「ぐ……ぐもも……ぶはあぁぁっ！！」

私は押しつけられた枕からようやくのことで顔面を引き抜く。

「やっと起きた」
「ぜーぜー……」
しばらく私は酸欠のあまり白黒する視界を安定させようと呼吸を落ち着ける。
自分の部屋と同時に、ベッドの横に立つ者の姿も明確となってくる。
見上げると、そこに立っていたのは、制服を着た男の子だった。
「うわっ！どうして見知らぬ美少年が朝一番に私を起こしにくるのっ！？」
私はたまげ、背後の壁までにじり寄る。
「…なに言ってるんだよ」
その見知らぬ美少年は、呆れたように先ほど剥いた布団を両手に、開け放たれた窓まで歩いてゆく。
「まあ、冗談だけど…」
ベランダへと出た見知らぬ美少年（はもういいか）は、それを手摺に干すと、軽くパンパンと素手で叩く。
「でもなのはには、ほんといい旦那さん見つけてもらわないと心配だよ」
「なによ、それ」
「こう、気の強い人がいいんじゃないのかな。強引に引っ張っていってくれるような」

なんか聞いたような台詞。

「ほら、さっさと用意しないと遅刻するよ？」

敷布団まで干すのか、私を追い出すように言い放つ。

「なんていうか、現実的だよね、ユーノ君って」

「なんだよ、それ」

「ううん、べつに」

私は制服と鞄を両脇に抱え、部屋を後にした。

階下に降りると、誰の姿もなかった。

どうせまた美沙斗さんが、出かけ際に外で待っていたユーノに声でも掛けていったんだろう。

「まだ寝てるみたいだから、起こしてあげて」とか。

あの人はあの人で適当だからなぁ。

大体私じゃない別の人間がこの家にいつの間にか住んでいたって、一向に気づきはしないだろう。

それだけ仕事に忙しい。

彼女にとって家は眠るだけのためにあって、大体プライベートなんてものも存在しないんじゃないか、と思える。

それはそれで、こっちにとっては気楽でいいんだけど。

食卓には朝食の用意ができていたので、それの手で掴めるあたりを口に頬張る。

それから用を足し、洗面所で鏡の前に立ったぐらいで、再びユーノに捕まる。

「ほら、もう走らないと間に合わないよっ？」

「ううん、朝シャンがまだだよ」

真顔で言う私に、ユーノは腕時計を見て怒ったように口を尖らせた。

「そんなのしたことないだろっ」

「一度くらいやってみたいとも思うんだよ」

「休みの日にすればいいでしょ」

「べつに待っていなくていいから、先に行っててよ」

そこまで言い切ると、ユーのは困った表情で口をへの字にへにょっと曲げた。

「…ほんとにしたいの？それなら手伝うけど」

「いや、さらさらそんなつもりはないけど」

「……はぁ」

ユーノになんともやりきれないような溜め息をつかれる。

私もいい加減、中途半端な冗談で遅刻するのも馬鹿らしいと思い始めてきた。

「いこうか」

先にたって、玄関へと向かう。

玄関に出、伸びをする。吐いた息が微かに白い。

「ほら、急いで」

ユーノが私の背中を押す。

「時間は？」

「はい」

腕時計を見せてくれる。

「なるほど…確かに走らないと間に合わないね」

「言ってるでしょっ」

門を出、私たちは走り出す。

☆　☆　☆

速度を緩めることなく、走り続ける。まあ、このペースだと何とか間に合いそうだった。

タタタタ…

すぐ後にユーノもついてくる。

しかしこういう朝の光景にも慣れてきてしまっているけど、よくよく考えてみると不思議なものだった。

それはなんていうか、ひとつ何かが違っていればここには至っていなかった、という奇妙な感覚。

これまでに無数の分岐点があり、ここには至らない可能性がかなりの確立であったはずなのに、ここに至っている。

まあ裏を返せば、どこかには至るのだから、その時々でそんなことを思うのかもしれないけれど、それでも自分の人生として考えると、やはりこの巡り合わせは特別不思議だったりする。

身よりを失い、今の父方の叔母（美沙斗さんだ）のところに預けられたとき、私は7歳だった。
友達もいない。知った場所もない。私は幼く、町は言葉の通じない異国だった。
そこに現れたのがこいつだった。

☆　☆　☆

―――1989／XX／XX（X）

コン…！

いつものように部屋の中で塞ぎ込んでいると、窓ガラスが音をたてた。

コン…！

なんだ…？
二階だっていうのに……石でも投げてぶつけてるんだろうか？

コン…！

また、鳴った。イタズラか…。
放っておいたらいつか止むでしょう。

コン…！

しかしどれだけ時間が経っても、一向に止む様子などない。なんて根気のある奴なんだ…。

顔だけでも見てやろうと、私は窓をガラリと開け放った。

すると

ゴンッ！

眉間に大きな石をぶつけられ、私はしばらく頭をピヨらせ、その場に蹲ってしまう。

「うわ、あたっちゃったぁ…！」

下からそんな慌てた声が聞こえてくる。

「なにすんのよっ！」

腫れた額を押さえながら、私は立ち上がってそう怒鳴りつける。

「あの、あてるつもりなんかなかったんだよ！」

真下、塀のすぐ外に立つ男の子がこっちを見上げて弁解する。微かに見知った顔…確か、同じクラスの子だった。

それへ向けて、さらに糾弾を続ける。

「すごくいたかったんだからね！」

「ごめんなさい！あやまるからっ！」

「あくしつなイタズラよっ！」
「ただ呼んでただけなんだよっ！いっしょにあそうぼうって、さそいたかっただけなんだよぉっ！」
「うそつきっ！」
「うそじゃないよっ！」
「あしたからイジメてあげるから、カクゴしときなさいよっ！」
「うそじゃないのにぃっ！」

☆　☆　☆

それがすぐ後ろをタトタトと駆けるユーノだった。
あの日以来、私はユーノをイジメ続けた。

スカートめくりならぬ、パンツ下ろし、だとか…
靴隠しならぬ、靴が増えている、だとか…（他人の靴を下駄箱に入れてやるのだ）
必殺、給食ごとちゃぶ台返しだとか…（給食ごと、机をひっくり返してやるという、とても豪快な技よ）

よくもまあ、今の関係があるものだ。
だから、今に至る分岐を感慨深く思ったりするのかもしれないね。

「なのは、前！」

なんてことを思う。
って、私が『なのは、前！』と思うの…？

「きゃっ！」
「…え？」

ズドーーーーーーーーーーーーーンッ！！

衝突。
しかし私は寸前で身を庇いに入ったので、相手の方が派手にずしゃーーっ！ごろごろごろごろーっ！と地面を転がり滑るだけで済んだ。

「……」

というか、うつ伏せに地面に倒れる相手と、再び駆け出そうと身構えてすらいる自分を見比べると、どうも一方的に私が加害者であるかのようだ。

「これじゃまるで、私が悪いみたいじゃない…」
「…って、当然でしょっ！」

がばぁっ！とうつ伏せだった顔を上げる相手。
同い年ほどの女の子だ。あからさまに血相を変えている。

「ねぇ、そこの人見てたでしょっ！」

その少女が、私の後ろに居たユーノに目を向ける。

「え…？あ、うん……なのはが悪いかな…」
「なにっ！？危ないから姿勢を低くして下半身に重心を置いてからゆけって言ったのはユーノ君じゃないっ」
「そうなのっ！？」

「言ってない、言ってない！」
「ほら、この嘘つきっ！」
「イッタぁ～っ！足痛めたぁっ！急いでるのに、どうしてくれるのよっ！」

長い金髪をツインテールに纏めた少女は、一見大人しそうであり優しげな顔立ちをしている。
しかし鬼の如く怒り出す姿はとても同性とは思えない剣幕だった。

「いや、私だって急いでるのよ。参ったねー……そうだ、ユーノ君、後頼んだよ」
「ぼ、僕だって急いでるって！」

私はそんな言葉は無視して、一路学校へ向けて駆け出す。

「ま、待ってよ、なのは！」

校門を一気に駆け抜け、下駄箱まで直行する。

「はぁ…なんとか間に合ったね」

私が靴を履き替える頃に、ユーノも到着する。

「なんだ、ユーノ君も逃げてきたの」
「そんなっ、だって、僕は悪くないよ」
「まぁ、いいか…」

制服を見たところ、このあたりの学校の生徒じゃなかったようだし、二度と会う事もないだろう。
チャイムが鳴り響く中、教室に向けて廊下を歩いてゆく。

「しかし見た目と言動の落差が激しい女だったね…」
「うん、そだね」
教室に入る頃には、廊下の先に担任の姿をも確認できる時間だった。
「じゃ」
ユーノが廊下側の席で鞄を置く。
私はそのまま窓側の方まで進み、友人連中と二、三声交わし、そそくさと自分の席に着く。
入れ替わり担任が教室に現れ、場が整然とする。ぱらぱらと立っていた生徒たちも、かったるそうに着席する。
私は窓の外に目をやり、担任の話が始まるのを待った。だけど、いつもと同じだったのはそこまでだった。
教室内の男の子連中が、急にざわめき色めきたつ。……なに？
私は目を教室に戻す。そしてその目を疑った。
なんと髭面の担任が、可愛らしい女の子に変わっていたのだ。
「んあー、静かにっ」
違う、髭面の担任はその隣に居た。
「こら、男連中、うるさいぞ。そこそこっ！ウェーブをするなっ！」
あまりに騒然としてしまったクラス内を沈めるのに必死の髭。
「んあー、先週の終わりに話したとおり、転校生くんだ」

そういえば、そんな話しを聞いていた気もする。

「じゃ、自己紹介どうぞ」

髭がそう言うと、ぴた、と喧騒が止む。それを見計らってその子が口を開く。

「フェイト・テスタロッサです」

しかしよく見ると、どこかで会ったことがあるような気がする。
…って、今朝、ぶつかった子じゃない！

ユーノの方をちらりと見ると、うんうん、と頷いていた。
しかし……まるで別人かと思うほどの変わり様だ。
大人しくしていれば、これほどまで変わるんだろうか…。

「えー、急な親の転勤の都合で、こんな時期はずれに転校することになってしまいました。
すごく不安だったんですけど、なんか皆さん楽しそうな方ばかりで、ほっとしましたぁっ」

なんて事を可愛らしく微笑みながら言うから、もう男子連中は歓喜乱舞、大騒ぎだ。

「静かにしろっ。ほらそこっ、危ないから机の上で踊るんじゃないっ」
「それではよろしくお願いします」

ぺこっと頭を下げる。

それに対して男子連中が、歓迎の声をあげる。

「んあー、で、席の方だが…そこの列がひとり少ないな」

髭が私の方を見る。確かに私の列はひとり少なかった。

「高町。廊下に机が持ってきてあるから、それをお前の後ろに並べてやってくれ」

それだけ言うと、私の返事も聞かずに髭はＨＲを締めくくりにかかる。

「では、みんなあまり質問攻めにしないようにな。以上」

そしてひとり教室を出てゆく。

すると、わっと転校生の周りに輪ができる。

「はぁ…」

私はそれを横目になんともやりきれない溜め息をつきながら、彼のための机を取りに廊下に出た。

それを抱えて、教室に戻り、そして自分の席の真後ろに置く。

が、考え直して私の席を最後尾にし、その前に彼の机を並べる。

「あ、勝手に位置変えてる」

「あんな奴に後ろにいられたら、いつか刺されそうだからね」

「でも先生、なのはの後ろにテスタロッサさんの席をつけろって言ってたじゃないか」

「髭はそんなこと気にしないよ」

「まあ、そうだけどね」

髭はおおらかな奴なのだ。
「で、なのはは、どう思う？」
黒板前にできた人だかりを見て言う。
「さあねぇ…しかし今朝の剣幕からは想像できないくらい別人のようだね」
「大人しそうに見えて、意外に芯はしっかりしてるのかも」
「そんな結論にいきつく？」
「その性格って、なのはに向いてるんじゃない？」
「なにが」
ユーノは微笑みながら、どこか薦めるように言う。
「案外運命の出会いだったりするかも知れないね。席もすぐ前だし、話す機会も多いだろうし」
「また、それなの…ユーノ君はやたらと私を他の男の子とくっつけたがるよね。
でも残念ながら今回は女の子だけど」
「ちゃんと面倒見てくれる人が居ないと心配だよ、なのはは」
そう言い残し、一時間目の始まりのチャイムとともにユーノは自分の席へと戻ってゆく。
まったくユーノ君は、まるで私の父親気取りだね…。
まぁ、実際近いもんがあるけど…。
「あの」

入れ替わり、声。

「はい？」

顔を上げると、転校生だった。

「ありがとう、机、持ってきてもらって」

「足はもう大丈夫なの…？」

「え？……」

一瞬で爽やかな微笑が凍りつき、眉がぴくぴくと芋虫のように跳ねた。

「……ぐぁっ」

ようやっと私の顔を思い出したようだ。

「……」

凍り付いたように無言。

「いやぁ、今朝はすごい剣幕だったね」

「…えっと、高町さんって言ったっけ？よろしくね」

私の言葉を無視して、そそくさと席に座ろうとする。

「そっちは私の席。あなたは、その前」

「え？あ、前後入れかえたんだ」

「ところで今朝はすごい剣幕だったね」

「……」

無言で座り、背中を向ける。
そこで教師が入って来、一時間目の授業が始まった。

☆　☆　☆

かっかっと黒板にチョークが打ちつけられる音だけが響く中、私はシャーペンを持つ手を止めたまま、目の前の後頭部をぼーっと見入る。
うーん、何を猫被ってるんだろう、こいつは。
それとも、今朝のコとは別人とか…？

よし、確かめてやろう。

私は、フェイトの長く垂れた髪の毛の先を、椅子の背の部分に結びつけてやる。
さて、どんな反応を示すだろうか。

……。

ようやく、チャイムが授業の終わりを告げる。

「今日はここまで」

先生がぽん、とまとめた教科書で教卓を叩く。

「起立！」

ガタンッ！

…ゴキィッ！

ものすごい音がした。

「ぐ…あ…」

フェイトが目の前で、とても奇妙な体勢で止まっている。
立ち上がろうとしたところへ、髪が椅子の背にくくりつけてあるもんだから、思い切り首を後ろに曲げて体を反らせていた。

「礼！」

教室は休み時間へと入る。

どすん！

フェイトは一度、椅子に座り直すと、振り向き、椅子の背から髪を解く。
そしてゆっくり立ち上がり、私の正面に立つ。

「殺す気かぁっ！このアホぉっ！」

そう唾を飛ばす。

「おー、やっぱり今朝のコとは同一人物だったんだね」

「…はっ」

正気に戻ったらしい。もっとも、どっちが正気かは知らないが。
「…あ…えっと…ごほっ…ごほっごほっ…！」
唐突に咳き込むふりなどをして、一目散に教室を飛び出してゆく。
なんとも取って付けたような誤魔化し方だったけど…。
「あれ、テスタロッサさん、どうしたのかな？」
また質問攻めにしようと集まりかけていた男子連中は、まだ彼女の本性に気付いていないらしい。
「高町さん、何かちょっかい出したの？」
「いえ、なにも」
「でもいいよね、高町、真後ろで」
クロノがいないとなると、やることなく男子連中は解散する。
入れ替わり、ユーノが現れる。
「……はぁ」
「いきなりだね」
「そりゃそうだよ。あんな事するんだもん」
「見てたの？」
「見るもなにも、ぐきぃ！ってすごい音がしてたよ。むち打ちにでもなってんじゃ…」
「いえ、おかげで風邪をこじらせたようだったけど…」
「なんだよそれ」
「さぁ」
「なのは、あんまりイジめちゃだめだよ。これからもずっとこの席

でやっていくんだから」

そんなことを心配顔で言ってのけ、自分の席に戻ってゆく。
しかしユーノ君はいつだって、私の行動をチェックしている気がする…。

……。

2時間目の始まるチャイムとともに、たったった、と足早にフェイトが戻ってくる。
私のほうを一瞥した後、どすっ！と大きな音をたてて、席に座る。
あきらかに私をけん制しているようだった。

うーん…。

確かに、ユーノ君の言う通りかもしれない。あんまり悪い印象のまま、真後ろにいるわけにもいかない…。

「ねぇ、テスタロッサさん」

私はフェイトの背中をぽんと叩き、声をかける。

「仲良くやっていこうよ」
「よく言えるわね、んなことがっ…！」

押し殺した声で、糾弾してくる。

「あんなことした直後にっ…」
「いや、あれは、朝ぶつかったコと同一人物かなぁって思って…」
「そっ、そんなのあたりま…もう話しかけないでっ！」

ついと前を向く。
その先には2時間目の科目担当の教師がすでに立っていた。
……。

昼休み。
購買でパンを買って戻ってくると、案の定、自分の席で昼食をとれる余地などなくなっていた。
男子連中がフェイトの周りを囲んで、早くも会話に花を咲かせていたからだ。
フェイト自身も呆れながらも、小さな弁当箱をつつきながら、会話を楽しんでいるふうにも見える。

「大変だね、人気者がすぐ前の席で」

ドアの前で立ち往生しているところへ、ユーノが現れる。
手には紙パックの牛乳を持っていた。

「仕方がないね。屋上にでもいこうかな」
「屋上？寒いよ」
「そう？大丈夫だと思うけど」
「僕の席で食べようよ」
「ユーノ君の席で…？」

ユーノ君の席で食べる
断る

＊＊＊＊＊

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0116w/

永遠少女ＯＮＥなのは～輝く季節なの～

2011年10月9日00時06分発行